opusdei.org

司 牧 書 簡(2011年 10月2日)

「霊的生活のため、またヨハネ・パウロ二世が定義された"再福音化"の一端を担うため、この面での養成について、いくつかの考察をしたいと思います。」 2011年10月2日、ローマ

2012/03/26

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! 1.主から使徒職の使命を託された (マタイ28.19-20参照) 教会は、福 音盲教を中断したことはありませ ん。何世紀にもわたる時の流れの中 で、多くの実りがありました。神の 恩恵によってオプス・デイにおいて も、個々の信者においてもそうでし た。過ぎ去った時代と同じように今 日でも、反キリスト教化の潮流があ らゆる分野で勢いを増していってい ますが、それは人類に多大な損害を もたらす現象です。こういう時、神 はいつも教会に聖人たちを送り、そ の言葉と模範で、人々をキリストに 立ち戻らせてくださいました。ベネ ディクト16世が回勅『希望による救 い』でこう述べておられます。「キ リスト教は単なる"よい知らせ"では ありません。すなわち、単にこれま で知られていなかった内容を伝える ことではありません。福音は、ある ことを伝達して、知らせるだけでは なく、あることを引き起こし、生活

を変えるような伝達行為なので す。」[1]

ここで私は、霊的生活のため、また ヨハネ・パウロ二世が定義された"再 福音化"の一端を担うため、この面で の養成について、いくつかの考察を したいと思います。

1985年、創立者の最初の後継者は、 私たちあての司牧書簡で、この使徒 職を積極的に推進するよう促し、そ のため、私たち自身の丁寧な自己形 成と使徒職の進展に力を注ぐことが 必要だと繰り返されました。

ベネディクト16世も今、この同じ道を辿るよう信者に呼びかけておられます。最近、聖座で再福音化推進委員会が設けられたことから、教皇様がこのことに深い関心を示されてることが分かります [2]。今年のワールドユースデーでの教皇様の御言葉は私たち皆に対する嘆願だと思います。若者たちにこう励まされま

した。「イエスとの友愛はまた、よさ場で信仰をあいは拒絶できるいは拒絶をします。それには拒絶をもれることもでいます。他のようかと出生していません。もりませんができませるとはのものを必要としています。」[3]

再福音化のための形成 初代信者に倣 う

2.オプス・デイは、まさしく聖性と使 徒職が普遍的な招きであることを思 い起こさせるために誕生しました。 聖ホセマリアがこう強調していまし た。「オプス・デイを理解する近道 は、初代信者の生活を考えることで す。彼らはキリスト信者の召し出し の根本を自ら生きていました。洗礼 によって招き入れられた、単純で気高い状態にふさわしい完徳の生活をするようまじめに努めていましたが、外見上には他の住民と変わったところは全くなかったのです。」
[4]

聖霊降臨のとき、聖霊は12使徒と他 の弟子たちの心にイエス・キリスト の教えを生き生きと喚起させ、彼ら を福音宣教に駆り立てました。新約 聖書を一読するだけで、12使徒が信 仰の種を植え付け、言葉と手紙でそ の信仰を養うことに、いかに熱心で あったかがよく分かります。主が3 年にわたって根気強く12使徒を養成 なさり、聖霊の働きかけのもと、そ の教えが彼らとその協力者たちに よって途絶えることなく伝え広めら れた結果、古代社会をキリスト教化 するに至りました。

形成の必要性と重要性

3.聖ホセマリアは、皆がキリスト者 としての形成を継続的に受け、よい 信者になるように促していました。 もちろん、それにはイエス・キリス トとの親しさを深め、人々にキリス トを伝えることが不可欠です。 **"**

Discite benefacere " — 善を行うこ **とを学びなさい** (イザヤ1,17)、と イザヤ預言者の言葉で繰り返してい ました。 「**救いのためのどれほど素 晴らしい教えでも、それを実行でき** る人がいなければ何の役にも立たな **いからです。** | [5] 聖ホセマリアは 司祭職についた最初から、自らの司 牧活動に近づいてきた人々に教理を 教えることに身を投じました。そし てオプス・デイの進展とともに、この 仕事を強化し、形成の務めを継続さ せるのに必要な手段を講じました。 まず、彼の霊的子供たちのため、さ らに、このメッセージを受け入れる 心積もりのある、数えきれないほど

の男女に、つまり若者や中高年、健

康な人や病気の人たちに対しても、 そうしました。

創立者は、形成の5つの側面につい て考えました。すなわち、人間的な 面、霊的な面、宗教・教理的側面、 使徒職面、そして職業面です。「男 性でも女性でも「人間は徐々に成長 します。しかし、あらゆる面で完全 に成熟することはできません。人間 としての本性が到達し得る完全性を ことごとく実現させることはできな いのです。ある面では、他の人々と 比べて最高のレベルまで達すること ができ、自然的レベルにおける何か の活動において誰にも負けないよう になるかもしれません。しかし、キ リスト者としての成長には、限界は **ないのです**。| [6]

誠実に糾明するなら、人間的な面の 形成において、性格やふるまい方を 正す必要のあることにすぐに気づき ます。つまり、超自然的徳を支える 自然徳を身に付け、向上させる必要があるのです。霊的な形成においても同じことが言えます。キリスト教的諸徳において、ことに完徳に至るための本質的な徳、愛徳においては常に向上の余地があるものです。

宗教的・教理的な形成においても、神と啓示された教えについての知識を深めることができるし、またそうしなければなりません。私たちの知性と意志と心を信仰の神秘にしっかりと一致させるため、その知識を徹底的に自分のものにすることです。

次に、使徒職についていえば、それは「果てしない海原」であり、新たな環境やより多くの国々にキリストの愛を広めるための準備が必要です。オプス・デイ草創期の直筆の文に見られるように、聖ホセマリアは最初から次のようなプログラムを持っていました。「キリストを知ること。キリストを知らせること。キリストを知らせること。キリストを知らせること。

ストをあらゆるところに伝えること。」 職業上の信望は「人を漁する釣り針」 [7] になります。それは、教会において既に実現しているキリストの支配が社会に及ぶようにするためです。

壮大なパノラマです。私たちは決して「私の形成は終わった」などとは言えません。「私たちは決して、もう十分だ、とは言いません。自己形成に終わりはありません。皆さんがこれまでに受けたことはすべて、後ほど訪れることを支える土台なのです」 [8] と創立者は説明されました。

自由、素直さ、責任感

4.イエス・キリストとの一体化は人の自由な協力によって達成できるものです。「あなたなしにあなたを造られた方は、あなたなしに義化することはなさいません。」 [9] 個人的な応えが不可欠の条件ですが、人間

の手に余ることは神の恩恵が実現させてくださいます。「主が私たちにくださった自由は偉大な善である。しかしまた、聖性と愛の源でもありまた、聖性と愛の源、というのも、というのも、なるの強力がある。」 [10] 愛の源、をして、会して、会になることはできるとことはできるととはできることはできることはできることはできることはできることはできることはできることになることはできることになることはでも、忠実になることは神の恩恵が私になることは神の恩恵が私になることは神の恩恵が私になることは神の恩恵が私になることは神の恩恵が私になることは神の恩恵が私になることは神の恩恵が私になる。

教会には、罪に由来する人々の弱さをいやす手段があります。罪に中でもりますが、の内的な自由を削いでつまりはな自由を削いでつまりしての本来なられるだけではない。事実、イエス・は私たちを「滅びへの隷属から」

解放してくださいました。それは 「神の子供たちの栄光に輝く自由に 与らせるためです。」 (ローマ 8,21) 「だから、しっかりしなさ い。奴隷のくびきに二度と繋がれて はなりません」 (ガラテヤ5,1) と

聖ホセマリアが招いています。

使徒が励ましています。

「"生命"を選ぶ決心は固いでしょうか。聖性に向かえと励ます、愛でできるではい。とき、すすんでではいい。と答えているでしょうがと答えてください。」 [11] その招きに向人的におえる。またのでは、のおいているがあるののは、に変をいるのは、に変をいるののようにです。です。

「一個の人間としての自由、私はこ の自由を、今も、いつまでも、力の かぎり弁護するつもりですが、とに かくこの自由のおかげで、自分の弱 さを知りつつも、大船に乗った気で 主に申し上げることができるので す。"主よ、何をお望みかおっ しゃってください。そして私がすす んでそれを果たせますように"。| [12] そして創立者はこう続けておら れます。 「キリストは御自ら答えて くださいます。" veritas liberabit vos "一真理はあなたたちを自由な者 とするだろう (ヨハネ 8.32)。と ころで、生涯をつらぬく、この自由 の道の始まりであり、終わりである **真理とは、一体どのような真理のこ** となのでしょう。神と人間の関係を 知れば当然持ちうる喜びと確信に満 ちた答えを要約してみましょう。こ こで言う真理とは、私たちが神のみ 手から生まれ、至聖なる三位一体の 深い愛の対象となり、かくも偉大な 御父の子であるということ。」 [13]

5. オプス・デイに所属するに際して、各自が教会の懐におけるオプス・デイの使命を果たすために形成を受ける約束を自由に受け入れます。ですから神のお望みに忠実に従って、聖ホセマリアが定めた固有の形成の手段に感謝して参加します。

「教理について正しい形成を受ける 義務、そして人々に理解してもらえ るように自らよく準備する義務」に 力しまりで またなで またが、後でそれは、私たち から聞いた人たちが、後でそれなも ら説明することができるようにすか らいでもあります。」 [14] ですか らいでもありに 活用する心積もりで があるのです。

ヨハネ・パウロ二世がこう述べておられます。「養成が実り豊かなものとなるためには、いくつかの確信を持っている必要があります。第一の

確信は、それぞれが、養成のために 責任を自ら担ったり、身につけよう としたりしないならば、真の養成は なく、またその効果もないというこ とです。実際、養成は本来、"自己養 成"だからです。第二の確信は、私た ち一人ひとりが、養成の目標である と同時に出発点でもあると言うこと です。私たちは、養成されればされ るほど、また自分の養成が深められ る必要を感じれば感じるほど実際に 養成され、他の人々を養成すること もできるようになるからです。| [15]

人間的形成

6.人間的な側面の形成は諸徳を強化し、気骨ある人にしていくことにあります。主のお望みは、「完全な神、完全な人間」 [16] であられる主を見つめることによって、私たちが非常に人間的かつ神的になることです。

聖性という建物は、人間的な土台の 上に築かれます。恩恵は自然を前とするものです。それゆえ第二バー カン公会議は、信徒に人間としている 諸徳を高く評価するよう勧めのある。「社会生活に関係のある真に です。「社会生活に関係のあ真実 のです。ずなわち誠実、正義感、減なの 親切、勇気を重視しなければ、真ら い。これらの諸徳なしにはい。 リスト教的生活は成立しない。 177

堅実な人格は、家庭や学校、職場やり 交友関係など様々な生活場面では、気高では、気高では、気高では、気高ではいるでは、気ででは、必要でが改善され、がなりませんがではではではではではでは、大きなからでは、大きない。 というではながでは、ないではではではではでは、大きないではではではではではではではではでいる。 の土かいて聞く機会に恵ったがいます。 はこれなかないます。 はこれなかないます。 にも誠実で忠実な心構え、、体にも は、人間的に真面目な態度が見られ ます。このような心構えを持つ人なら神に対してすぐに心を開き得るはずであると私は敢えて断言したい。 超自然徳の基となる自然徳を身につけている人々であるからです。」 [18]

現代はいつにもまして自然徳の価値と必要性を再認識する必要れがいるとこれででででででで、で、一次のでは、一次のでは、一次では、一次では、一次のでは、一次のでは、一次のでは、一次では、一次のでは、一次のでは、一次のでは、一次のでは、一次のでは、一次のでは、一次では、一次では、一次では、一次

これらの価値を受け容れるのに難色 を示すところがあったとしても、自 然徳が魅力を失ってしまったわけで はありません。キャッチフレーズが どれほど多くても心は満たされませ ん。人間は究極的に、真に価値ある、 ものを求めるものです。それゆえ、 キリスト者にはそれを示す大事な役 目があるのです。まず自ら模範を して高潔な生活の美しさを、のまま して充足した、幸せな生活を 提示することです。

現在では、とくに節制と剛毅の大切さを示すことです。

節制

7. 「節制とは自らの主人であることです。」 主人であるためには次のためには次のです。「心と体をとことです。「心と体をといることを、実際にことを、実際にことを、実際にません。できるがままにはないうわけではないのでずらぬというわけではないのでずらぬというものに引きでするのは易しいことであると、しまいには、悲し

みに襲われ、自己の惨めさの中で孤 独をかこつことになるでしょう。」 [19]

この徳は欲望を秩序付けて節度ある ものにし、理性によって熱情がしっ かり治められるようにします。その 働きを、単に否定することに限る と、この徳の戯画になってしまいま す。この徳は、甘美なものとそれが 発する魅力とを、人間の全人格的な 成熟と霊魂の健康のために、調和あ る形で融合させるものです。 「**節制** は偉大さを示すのであって、制限を 意味するのではない。不節制である がためにこそ不自由になる。ブリキ でできた鈴のようなつまらない響き にすぐ負けてしまう、つまり価値の ないものにすぐ心を奪われてしまう **のです**。| [20]

不節制によって、真に良いものを見 きわめるのが難しくなるのは経験ず みです。ものごとが楽しいかどうか だけで自分の意思を決めてしまう人 がいるのは、何と残念なことでしょ う。不節制な人は、周りの雰囲気に 呑まれて様々な感情に引きずられる ままになってしまう。ものごとの真 の姿を脇に置いて、はかない事柄に 幸せを追い求める。しかしそれらは 一過性の感覚的なものですから、完 全に満足させてくれることは決して ないばかりか、人を不安にし、動揺 させます。そして人を自己破滅の渦 の中に投げ込んでしまう。逆に節制 は、落ち着きと安らぎをもたらしま す。良い望みや気高い情熱を冷まし たり否定したりすることはなく、か えって自己を支配できる人にしま す。

この点でキリスト教的な家庭を作るように励んでいるスーパーヌメラリーには、特別の責任があります。 聖ホセマリアが述べています。両親は子供たちに「**慎ましく生きるよう**(…)」教えなければなりません。

「それは、難しいことですが、勇気 を持たねばなりません。節制を教え **る勇気を持ってください**| [21] この 生き方を伝えるために最も効果的な 方法は、何よりも幼年期に模範を示 すことです。つまり、子供たちへの 愛ゆえに自分の気まぐれを放棄し、 子供たちに付き添い世話をするため に、自己の休息を返上して両親とし ての使命を果たすこと。そのような 皆さんの手本を眺めることによって のみ、子供たちはこの徳の美しさを 理解できるはずです。自分が使って いるものをきちんと管理できるよう に、助けてあげなさい。それは子供 たちにとって大きな恵みになるで しょう。繰り返します。皆さんの家 庭で節制の徳を大事にするなら、主 は皆さんの自己放棄と、母親として 父親としての犠牲にお報いになり、 皆さんの家庭の中から神に自己を捧 げる召し出しを起こされることで しょう。

勇気

8.時折、仕事や犠牲、自己放棄のための努力に抵抗したくなることがあるものです。勇気とは「困難にあれても断固として粘り強く善を追しても断固としてす。誘惑に抵抗したので書を力にを固めさせてくれるものです。勇気の徳は、死の恐怖さえとがす。勇気の徳は、死の恐怖さえとができるようにしてくれます。」[22]

疲れや他人の性格、不正や手段の欠 如に由来する意に反することを軽や かに担うことができるようにしてく れます。「自己の良心に従ってなす べきことを知り、これを最後まで果 たす人、そのような人は剛毅の人と 言えます。仕事の価値を自分の得る 利益によってではなく、常に仕事を 通して人々に提供できる奉仕の値打 ちによって計る。強い人は、ときど き苦しむことはあっても、抵抗でき る。たぶん泣くこともあるでしょ う。しかし涙を抑えることができ、 大きな困難や反対にも屈することは ない。| [23]

世の中で日毎に自己の聖化と使徒職を実行していくには、たしかに強さが必要です。困難にも遭遇するでしょう。しかし、神の力を得て働く人は、恐れることなく信仰を宣言し、擁護し、信仰を行いに表します。時として世の流れに逆らって行かねばならないとしても。一"

quoniam tu es fortitudo mea "

(詩編30[31],5) — 主よ、御身は私 **の砦(とりで**)、ですから。改めて 初代キリスト教徒に目を向けてみま しょう。彼らは数知れない困難に遭 遇しました。今と同じように当時 も、キリストの教えは「反対を受け **るしるし**」(ルカ2,34)として現れ たからです。「多くのキリスト信者 が沈黙のうちに英雄的なあかしを行 いました。彼らは妥協することなく 福音を生き、自分の務めを果たし、 (…) 自らをささげたからです。| [24] 現代社会は、日常生活において そのように自己を捧げる男女を必要 としています。

品性

9.自然徳を育むよう熱心に励むことは "bonus odor Christi" (ニコリント2,15参照) ―キリストのよき香り―をかもし出すのに役立ちます。この文脈においてとりわけ大切なの

今日ではとくに、品性に配慮し、周 りにもその雰囲気を伝えること社会の雰囲気を伝えること社会でも、家庭でも社会でも、家庭でも社会でいます。 自然さを口実に、いまが軽視されて方法が合いたが、での分野での形成に役立つ方法が合するが がいまずに役立のおいのですが、からないとりもまず模範です。 付き 合っている相手への敬意は、上品で 慎み深い服装に表れ、会話の話題や 団欒のテーマにも表れます。また、 家庭や学校、娯楽や休息の場で朗ら かな奉仕の精神を育むことにも表れ ます。家の調度品を大切に扱い、小 さなことに気を配る細やかさにも表 れるのです。

めいめいが、自分が学んだ専門分 野、過ごしている社会の雰囲気、自 分の好みや趣味といった個人けいないないないないないないで真でよう真であいた。 ここで重要なことが読書でありに活されるという点をとであるという点をであるというだけに留めてもらうだけに留めてもらったけに留めてもらったけに留めてもます。

10.オプス・デイのセンターや属人区の信徒が推進している使徒職事業では、青年たちが物惜しみしない心と

彼らが向上心と犠牲の精神をもったと犠牲の精神を育りな気高い理想自然を育的な気高い理想自然を見られた。その努力の卓越性と超値を表して気に気に気になった。というになるでしょうにがようにがあるという。はなるともならにあるという。

ヨハネ・パウロ二世がある時こう語 られました。多くの青年男女は「人 牛の意義とその手本となるものを強 く求めており、宗教的倫理的な混乱 から解放されたいと願っています。 この面で彼らを助けてください。事 実、新しい世代の人々は、時に無意 識でそうしているにしても、宗教的 価値に対して開放的で敏感です。宗 教にしても倫理にしても相対的な立 場では幸せになれず、真理に基づか ない自由は空しい幻想に過ぎないこ とを直感しています。」 [26] 人が偏 狭な視野の下で形成されると、真の 人間的キリスト教的な形成を身につ けるのがとても難しくなります。こ の世の問題に果敢に取り組むことが できるように、若者たちを励まし続 けましょう。

司祭職の品位

11.司牧職の本質からいえることですが、司祭たちも自然徳を実行するこ

とが不可欠なのは明らかです。司祭は、世の中のあらゆる階層の人たちと直接に関わりながら役務を果たします。ドン・アルバロがこう明言されました。人々は「司祭たちを容赦なく判断するものですが、なによりも司祭の人間としてのふるまい方に注目します。」[27]

親切で礼儀正しく、人々のために時間を惜しみなく使う司祭は、立派な人として見られ、キリスト者の戦いを喜ばしいものにすることができます。

どのような状況にあっても聖ホセマリアは、司祭としてもっていた高貴な理想から目をそらすことはありにした。すべての人のもとに自分がすべてとならねばならいとしてもがすべてとならねばならいとはがしてとならればならいとはなり方で、人々の中ではイエス・キリストの代理であることを忘れてはなり

ません。したがって、司祭は自分の 個人的な限界を知りつつも、自分の ふるまいを通して、周りの信仰者た ちが主のみ顔を見いだすことができ るよう努めなければならないのは、 当然なことです。創立者が聖職者た ちに頼んでいたことは今でもすべて 有効です。創立者は、司祭たちにき ちんとした服装をするように切願し ていましたが、それは、人がその服 装を見て、キリストの役務者として の司祭を認め、神の神秘の管理者 (一コリント4,1参照)としての身分 を見分けることができるためです。

司祭の祭司職は、その全生活に及び ます。だからこそ、その身分を実際 に現すべきで、いつでも司祭として 応対できるように、簡単に見分けて もらう必要があるのです。スーラージャン ついたシャツ)といった服装をもり のは、司祭であることをはっき 見分けてもらうためです。外見を重 要視する文化と密着していると同時 に、神からは遠のいているように見 える現代社会においては、司祭とし ての服装が見逃されることはないで しょう。ですから、教会で司牧に携 わる属人区の司祭は、聖堂内でいつ もスータンを着用することにしてい ます。私たちのセンターでも同じこ とです。創立者がコメントしていた のですが、 「**習慣の異なる国につい** ては何も言えません。私たちはいつ でも教会の指示通りにします。しか し、家の中ではスータンを着ましょ う。自由について語る人は、少なく とも、私たちが家で何を着るかの自 由くらいは尊重してくれるべきで す。」[28] 霊的形成

12.これは「各人の生活で優先されるべき」側面です。「だれでもイエス・キリストとの親密さを深め、御父のみ旨に忠実に従い、他者に対して愛と正義のうちに献身するようにと招かれているからです。| [29]

教皇ベネディクト16世がこう思い起 こさせてくださいました。「教会の 最古の伝統の中で、キリスト教の教 育課程はつねに体験的な性格を持っ ていました。この教育は、信仰内容 に関する体系的な理解をおろそかに することなく、生き生きとした、 人々を納得させることのできるキリ ストとの出会いを中心とします。キ リストは真の意味での証人によって 告げ知らされます。| [30] キリスト に一致した生活、つまり聖性の追求 は、カトリックの教理の知識、典礼 と秘跡に与る生活、霊的な同伴など の、霊的支援によって養われます。

イエス・キリストと一つになること

13. 教会の中で、聖霊の働きかけを 受けてイエス・キリストに従う道 は、数知れずあります。創立者がこ う述べています。 「天国の聖人たち がそれぞれ独特の個性を備えている ように、あなたたちは各々異なって いるはずである。と同時に、聖人たちと同じく、あなたたちは互いに似ていなければならない。聖人たち各々がキリストと同化していなかったら、聖人にはならなかったはずだからである。」[31]

オプス・デイは、メンバーとその使徒 職に近づく人たちに、教会の伝統的 な信心業を実行するよう勧めるとと もに、めいめいが自己の生活に立ち 向かい、キリストにおける神との親 子関係を基盤とした自分の人生に、 意味を与えてくれるひとつの精神を 伝えます。自分と他者を聖化する業 はすべて、仕事(専門職)という"基 軸"一蝶つがいのついた柱―に支えら れて回っている、すなわち、イエ ス・キリストと一致して、人々に仕 えたいという望みを抱き、できる限 り上手になされた仕事を中心にして 回っているのです。

このような霊的助けを受けると、"生活の一致"(首尾一貫した生活)がたやすくできるようになります。というのも、属人区と聖十字架司祭スとの人口の具体的な状で、事性と使徒職の機会するでは、事の間人のできるとを学ぶからでないができる。とを学ぶからでないがでないができる。というのとはせた、職業や家族、社会やのに任せた、職業や家族、社会ががいる。は、まったく自由に対処します。

この意味で、聖ホセマリアが次のよりに説明しています。「仕事と観想を別々にすることはできません。こまでが祈りで、こまでが仕事のできまでが行ったはできないのうちに観があり続けます。外面的には活動の人家ももが到達するところまでたどり着った。"高く高く飛翔して/できましょう。で高く飛翔して/できましょう。」[32] 教皇ヨハネ・パウロ

二世が、カステルガンドルフォでオ プス・デイのメンバーに語られたお言 葉に、この教えが反映されているの ではないでしょうか。「世の中のあ らゆる状況において、神と一致して 生きること、恩恵の助けを得て自分 自身が向上していくとともに、生活 の証(あかし)によって人々にイエ ス・キリストを知らせること―この 理想以上に美しく、人を夢中にさせ るものがあるでしょうか。あなたが たは、喜びと悲しみが交錯するこの 人間社会を愛し、照らし、救うこと を望んでいます。」[33] **手段**

14.仕事と修徳の戦いをひとつにし、 観想と使徒としての使命の遂行を一 致させるには、周到な準備が必要で す。そのためオプス・デイは、個人的 な形成と共同で与る形成からなる、 多岐にわたる手段を提供してくれま す。個人的な形成の中でもとりわけ 重要な手段とみなされるのが、兄弟 との話です。それは一対一でなされ る信頼に満ちたものなので、"コンフィデンス" * とも呼ばれます。

霊的指導のための対話であり、兄弟 への奉仕として位置付けられます。 それは、社会の只中で、自由に、そ して責任感をもって、キリストと日 毎に出会う生き方を徹底するためで す。すでに新約聖書に見られること ですが、主は、人が聖性の高みを目 指して歩むために、他の男女の仲介 を役立てることを望まれました。ダ マスコへの途上で聖パウロをお召し になったとき、これから彼が立ち向 かうはずの新しい道について、知っ ておくべきことを伝えようとして、 アナニアという人物のもとに行くよ うに頼まれました(使徒言行録 9,6-18; 22,10-15参照)。その後、パ ウロは、"videre

Petrum "一ペトロに会うために、そして彼から教理とキリスト者の生活についてたくさん学ぶために、エル

サレムに行きます(ガラテア1,18参照)。このように、霊的指導の精神は、初代教会にさかのぼる伝統の一つなのです。

オプス・デイにおけるこの霊的援助は、創立者が神から授かり、私たちに伝え、さらに教会によって聖性の道として推薦された [34] 精神、一その精神を忠実に自分のものにするよう人々を助けるためにあるのです。

15.聖ホセマリアはこう説明しました。オプス・デイにおける個人的な霊的指導は、"in actu"—その場だけで、つまりその対話の間に限って行われると。この配慮は、キリスト者としての生活を向上させるた雰囲気の中で生かされます。創立者は、のの霊的指導の務めを、弟や妹たちの世話をする兄や姉の役目にたとえ、導こを良いキリスト者になるように導え

オプス・デイにおいて、裁治権の行使と霊的指導はたしかに切り離されています。中でも、霊的指導において兄弟の話を聴く人―センターのでイレクターか、話を聴くためにといるではないの信徒、ゆるしの秘跡も行う司祭―は、まさに兄弟の打ちを聴いているからといって、そっているわけではないのです。各地域

のセンターを管理するために統治権 が行使されますが、それは人に関す る権限ではなく、ただセンターの運 営と使徒職活動に関することだけで す。センターのディレクターたち の、兄弟への働きかけは、兄弟的な 勧めを与えることです。それゆえ、 同じ人に、統治の権限(裁治権)と 霊的助けが同時に任されているわけ ではないのです。属人区において各 自に統治権を行使できる唯一の基礎 は裁治権であり、その権能は属人区 長と彼の代理者たちだけにありま す。

それなら、オプス・デイは何を提供するのでしょう。それは基本的に、属人区の信者と属人区に指導を仰ぐ人たちへの霊的指導です。属人区の信者は、自己の聖化を切に望み、教会におけるオプス・デイの使命の実現を望んでいるのですから、ディレクターが指定した人に話をします。たとえその人が自分より年下であって

も、通常は不都合と思わず、いつで も全く自由に、人間的な道具を通し てもたらされる神の恩恵を信じて、 話します。兄弟との話とは、良心に 関して決算報告をするような場では ありません。この霊的指導の中で、 なにか質問されることがあるなら、 一場合によって、質問されることは 良いことであり、必要でさえありま すが一、非常にデリケートに質問さ れることでしょう。コンフィデンス (兄弟との話)の中で、告解の中味 を具体的に言い表すことを義務付け られている人はいないからです。

子供たちよ、私が今話していることは、みんな分かりきったことだと思うかもしれません。けれども、今の社会の現実からこの点についまり、大けようと思ったのです。つまり、今の世の中は慎みに欠けていたり、他人の私生活に敬意を払わなかしても、個人のプライバシー(秘めごも、個人のプライバシー(秘めご

と、個人情報)を守ることについて は、ことのほか敏感なところがある からです。私たちがオプス・デイに出 会ったばかりのころに、自分の話を 聴いてくれる人を、"私の霊的指導 者"と呼んだことはなかったし、これ からもあり得ないことだと皆が説明 されました。その理由は単純です。 繰り返しますが、オプス・デイでは個 人にそのような役目を負わせること はないし、過去にも決してなかった ことです。コンフィデンスを聞く人 は、オプス・デイの精神になにかを付 け足したりせずに、そのまま伝える だけです。このような手伝いをする 人は、私たちの道の性格上、神なる 主の御前に人々を連れて行くため に、自分は消えうせるのです。創立 者は、オプス・デイという道について こう語りました。 「非常に広い道で す。右側を歩くことも左側を進むこ とも、馬に乗ったり自転車で行った りすることもできますし、ひざをつ きながら進んだり、幼児の頃そうし

たように、四つんばいになって進む こともできます。自分の好きなよう に歩みますが、いつも道からそれな いようにします。」 [36] ゆるしの秘 跡

16.この兄弟との話のほかに、通常は 毎週、司祭のもとに行って霊的助け を受けますが、それは毎週の告解と ひとつになっています。各センター に、私たちを助けてくれる聴罪司祭 が任命されているのは納得のいくこ とです。まずはじめに兄弟姉妹に全 面的に仕えるために叙階された司祭 であって、同じ精神を熟知して自ら 実行し、私たちを導くために―決し て命令するためでなく―特別に養成 されている人たちです。これは、私 たちが体調を崩した場合はたいて い、見ず知らずの医者にではなく、 かかりつけの医師に診断してもらう のに似ています。

それと同時に、聖ホセマリアはいつ もこう明言していました。属人区の 信者は、すべてのカトリック信者と 同じように、秘跡を授ける権能を 持っている司祭になら誰にでも全く 自由に告解したり、話を聴いても らったりできるのです。このとても 明白な真実を思い起こさせることで 驚くかも知れませんが、あえてこの ことに触れようと思うのは、オプス・ デイについて何も知らない人がいる こと、あるいはイエス・キリストに 従う人に固有な、自由の精神につい てあまり知らない人がいるかもしれ ないからです。さらに創立者は、兄 弟の話を聴く人と、告解を聴く人が ふつうは別の人であるように決めま した。

イニシアティブと素直さ

17.霊的指導では、受ける側にキリストにつき従う道で向上したいという望みが求められます。指導を受け始

めた人自身が、ふさわしい頻度で指導を求めに訪れて、誠実に心を開きます。こうして話を聴く側が、相手に目標を示唆し、あり得る逸脱のきに関を示し、困難に遭っているとさして、慰めとせるできるようにとができるようにも発してできるようにします。ですって行動するようにします。

「他のキリスト信者の助言、とくに 道徳と信仰に関する司祭の助言は、 特定の状況における神のお望みを知るために大いに助かります。とは任 るために大いに助かります。とば任 が決断しての責任を が決断しなければなり はんし、自分の決断は、神に個人 に申し上げねばならないでしょ う。」[37]

私たちが霊的指導に赴くのは、聖霊の働きに従って霊的に成長し、キリストと一致するためですが、その指導において誠実さと素直さの徳を養

わなければなりません。この二つの 徳は、聖霊に対する信仰者のあるべ き態度を要約するものです。聖ホセ マリアは、オプス・デイのメンバーだ けではなく、すべての信者に次のよ うに勧めています。 「**キリスト信者** としての道を歩む者にどのような義 務があるかは十分ご存じでしょう。 その道を休みなく歩んで行けば平穏 のうちに聖性へと導かれます。ま た、いくつかの困難に対してのみな らず、あらゆる問題に対し用心を怠 らない心をお持ちのことと思いま す。障害があるだろうことは、道の 始めのころからすでに予想していた ことです。そこで、いま私が力説し たいのは、皆さんが一人の霊的指導 者に、すべての聖なる野心と内的生 活にかかわる日々の問題、失敗と成 功についてつつまず打ち明け、指導 者の助けと導きにすべてを任せてほ しいということです。

「霊的指導を受けるにあたっては、できるだけ信実で誠実な態度で臨まなければなりません。何事であっても言わずに済ますことのないてういで、恐れや恥ずかしさを捨てて、心を完全に開くのです。もしそうしたなら、この平らで広い道もそかったなら、最初なんでもなかったとも大難事になってしまいます。」
[38]

主は、霊的指導での勧めを超自然的 観点で受け入れる謙遜な人に、つま りこの霊的な助けに聖霊の声を認め る人に、あり余るほどの恩恵を注が れます。聖性の道とは、心と思いの 本当の素直さがあって初めて進歩で きるものです。聖霊は、その霊感 と、話を聞いてくれる人の勧めを通 して「私たちの思い、望み、働きに 超自然的な色合いをそえて下さる御 方であるからです。人々にキリスト の教えを深く吸収させ、従わせるよ うに導く御方、各個人の使命を自覚 させ、神のお望みをすべて果たすた めの光をお与えになる御方は聖霊で す。聖霊に素直に従うなら、キリス トの似姿が私たちの中で次第に形づ くられ、日毎に父なる神に近づいて 行くことでしょう。"神の霊によって **導かれているすべての人、それが神** の子である"(ローマ 8.14)。| [40] 霊的指導を与えるときの謙遜と 賢明さ

18.今度は霊的指導を与える人の心構えについて考察したいと思います。大切なことは、あのようでなことがあるの人するとです。を変したです。を変したでするとです。を変したです。を変したでするです。できるでも、当ませんである。というでもは、というでもはないでもでもないためです。とないためです。

り、聖霊の照らしをより熱心に願う ことです。必要ならば、倫理的教示 に従って、より博学な人に相談する こともできます。そのような時に は、状況を脚色して仮想のケース厳 ように紹介し、職務上の沈黙を厳 に守るために、誰についての話なの に守るために、誰についします。 か全く分からないようにします。そ していつも賢明に振舞わなければな りません。

自分が助言を仰ぐのを望むかを決めるようにもちかけます。これは、最初から実行されてきた細やかさと賢明な態度を強化するための方法でもあります。

同時に、自分の内的生活について話 すために、直接パドレに、あるいは 国や地域のディレターのところに、 だれもが自由に行って話を聴いても らうことができます。これは、オプ ス・デイにおいて私たちが霊的指導 を求めて話しに行く人から、自分に 必要なこと、自分が望んでいること をいただくことができること、つま り聖ホセマリアから伝えられた精神 を、過不足なくそのまま受けている ことを保証してくれます。それとと もに、話の聞き手に求められている 守秘義務が、ないがしろにされるわ けでは決してありません。この義務 は細心の注意を払って厳格に守られ ます。この点で模範的でない人は、 霊的指導を与えるための基本的な心 構えを備えていないことになります。

他の人の世話をする人は、いつでも 相手の内的自由を育てるように努め ます。それは神の愛によって要求さ れることに、自ら進んで応えること ができるようにするためです。した がって、霊的指導はオプス・デイのメ ンバーを画一化するために提供され るわけではないのです。そういうや り方は理に合わず、自然でもありま せん。オプス·デイは 「**私たちが自** 由を享受し、多様性に富んでいてほ しいのです。けれども、私たちが責 任感のある首尾一貫したカトリック の市民であることを願っています。 めいめいが頭と心を別々に引き離す ことなく、両者を堅く一致させなけ ればなりません。それは、すべきこ ととしてはっきりと見たことを、い つでもやりとげるためです。個性の 欠如からか良心への不忠実から、世 の中の一時的な傾向や流行に引きず

られてはなりません。」 [41] 神が示してくださる道にそって、人々が歩めるように、当然ながらそれなりの勇気をもって人々に語りかけ、激励してあげるべきです。しかし同時で話すべです。話の聞き手は相手の主人です。なく、そう感じてもいませんし、ただ人々のしもべとして話を聞くからです。"Fortiter in re,

suaviter in modo ."一内容においては強く、やり方においてはやさしく。事実、「必要なときには傷口をひらいて、間に合わせではなく徹底的な治療をするのが賢明というものです。(…)私たちもまず自分自身に対して、次いで、正義あるいは愛の点から助けてやるべき人に対してそうします。」[42]

この具体的な点で、まず自分自身が 改善できなければ、という考えから 指導の役目を回避してはいけませ ん。「たとえ自分が病気、それも慢性の病に苦しんでいるとしても、医者は患者を治すのではありませんか。自分が病気であれは患者の処方箋を書くこともできないのでしょうか。他人を治療するには、自分のあを克服しようとするのと同じ関心をもって、必要な知識を患者に当てはめればよいのです。」 [43] 典礼に関する形成

19.霊的形成の中で、宗教的教理的形成と緊密に一致しているものとして、教会の聖なる典礼への愛があずます。その愛は、私たちの教霊が教芸がたかたちで実現するミサビジンをはいて、ないたちは信仰の主要な自身によって私たちは信仰の主要な自身に与えられます。聖三位一体ごうりとであります。」[45]

キリスト教のメッセージは"人を形成するもの"です。すなわち、福音書、それに典礼はあることを伝えて知らせるだけではなく、あることを引き起こして生活を変えるような伝達行為なのです[46]。

常識と超自然的感覚のある人なら、 典礼は"聖職者に属すること"だと か、聖職者が"司式し"、信徒は単 に"参加する"ものである、などとは 考えないでしょう。聖ホセマリアの 考えは、そのような考え方とはほど 遠く、全員が与るよう促していまし た。ことばの祭儀と感謝の祭儀との 密接なつながりを理解することから 始まり、祭儀における礼拝の本質的 要素を理解すること、さらに信徒用 のミサ典書の使い方のような具体的 な細かい点まで指導して、ミサに容 易に与れるように配慮していまし た。まず、心からの祈りであるこ と、次いで言葉と所定の動作によっ て祈りを表すこと。この教えを徹底 するために、前世紀の30年代にはすでに、司祭の唱える祈りに声を出して答える、対話式のミサを望んでいた、と言われたことを思い出します。第二バチカン公会議に先立つこと30年、その当時は普通に考えられることではなかったのです。

ことばの典礼

20.典礼によって祝され想起される救いの歴史全体は、神のイニシアティブによってなされたわけですから、私たち一人ひとりの実際の応答が求められ、望まれています。つまり、祭壇上の犠牲一ミサ聖祭一を24時間続けて行う意気込みで、一日全体を愛で形づくるように求められているのです。

ミサ聖祭におけることばの祭儀は、 細やかな答えが要求される本物の対 話です。すなわち、民に語りかける のは神であり、その民は「神のみこ とば」を沈黙や聖歌などを通して自 分のものとするのです。人々のこの 表明には、使徒信条における信仰告 白、全幅の信頼をもって主に寄せる 祈願も含まれます [47]。 朗読におい て、慰め主である聖霊は、「**私たち** が理性で悟り観想し、意志が強めら れ、教えを実行に移すようにと、人 間の言葉で語りかけてくださる! [48] のです。生活の中で実行に移す ことができるのは神の恩恵によりま すが、また、聖書を読み黙想する 人、聞く人の準備と熱意にもよりま す。 | 実際に私たちは、聖書の言葉 によって、諸徳の実行と純粋な観想

ここに、具体的な糾明点と、改善点が現れます。毎日、ミサ聖祭の聖書朗読からどのような実りを引き出していますか。福音朗読後の沈黙の時間を、主の宣教を思い巡らして味わい、自分の生活に取り込むために活用していますか。私が思い出したのは、このことです。「私たちの大勢

へと導かれます。」 [49]

が証言しているのは、聖ホセマリア がいかにミサ聖祭の朗読聖書の深み に"入りこんでいた"かです。それは 朗読の時の声でもわかりました。 度々、繰り返していたことがありま す。それは、ミサ聖祭の後、最も深 く感じ入った聖書のフレーズ(文 句)をメモして、自分の念祷で使っ ていたことです。こうして、彼の霊 魂は着実に豊かになり、説教も実り 多いものになりました。私たちも、 このとても立派な先生に倣うように しましょう。神は私たちの心を照ら して、創立者のことをよりよく、よ り深く知ることができるようにして くださり、体面を気にすることなく 人々にも彼のことを自然に伝えるよ うに教えてくださいます。| [50] 感 謝の祭儀

21.ミサ聖祭のこの部分で、司祭は基本的に、会衆に語りかけることをしません。実際に、司祭も信徒も皆、

霊的・内的に向かうところは、" versus

Deum per lesum Christum "一イエ ス・キリストを通して向かう神、な のです。感謝の典礼において、「司 祭と会衆はたしかにお互いに祈り合 うのではなく、唯一の主に向かいま す。ですから、祈りの間、同じ方向 を向き、後陣のキリスト像、あるい は十字架像を見つめます。また、主 がご受難の前夜、司祭としての祈り をなさった時のように、単に天を仰 ぐこともあります。| [51] こうして 自ら出会いに来てくださる主に対し て、自分のまなざしを祭壇上の十字 架に向けることによって、共に礼拝 する私たちは大きな助けをいただく ことになるのです。

22.祭壇のいけにえにおいて、お互いに緊密に一致している従順と信心が必要となります。それは、教会と個々のキリスト者にとって、典礼が

生活の源泉となり、頂点になるため に必要な基本的条件でもあります。 まず、従順です。「典礼のことばと 儀式は、幾世紀にもわたって練られ てきたキリスト理解の忠実な表現で あり、それらは、私たちがキリスト のように考えることを教えている (フィリッピ2,5参照)。私たちの精 神をこれらのことばに一致させるこ とによって、私たちは心を主に向 かって上げるのである。| [52] 個々 の言葉や動作、各定式(ルブリカ、 礼拝規定)を愛し、従わなければな らない深い理由はここに根ざしてい るのです。というのも、そのように して私たちが、"alter Christus, ipse Christus "一もう一人のキリスト、 キリスト自身―になるように助けて くださる神の賜をいただくことにな るからです。

第二バチカン公会議が、こう思い起 こさせてくれました。典礼から十全 な実りを得るには、個々の司祭と信 徒が心をこめて声に出すことです [53]。ベネディクト16世は、祭儀に ついて次のように説明されました。 「ここでの"声"は、私たちの考えに 先立ちます。普通はそうではありま せん。まず考えねばならず、その考 えを言葉に変えます。しかし、典礼 においては言葉が先に来ます。聖な る典礼が言葉を私たちに与えるので す。それで私たちはまず、これらの 言葉の中に入り込まねばなりませ ん。そして私たちに先立つその現実 に心を合わせることです (…)。こ れが第一の条件です。つまり、私た ち自身が典礼の言葉とその構造、神 の言葉を自分の中に取り込まなけれ ばなりません。こうして私たちは実 際に教会と"共に"、典礼儀式を執り 行うことになります。私たちの心は 広くなり、ほかでもなく、教会と"共 に"いて、神と語り合うのです。|

[54]

聖ホセマリアの生涯は、感嘆に値する深い信心と従順に根ざしており、彼の生活は実に現実的なお手本でした。「聖なるいけにえに対して最高の関心と愛を示す最もよい方法は、教会がその知恵をしぼって定めた祭式を細部に至るまで丹念に心をこめて守ることである。

愛を示すだけでなく、内的にも外的にもイエス・キリストに似る"必要"をも強く感じなければならない。広空間をそなたキリスト教ののを表順の要なところで、このなりにように優雅にしたがらる。キリストの花嫁をましたがある。キリストの花嫁まり、「55」

ミサ聖祭の構成に関するこの手短な 考察が、典礼に対する私たち全員の 関心を深めるのに役立つことを願っ

ています。典礼は霊的生活に欠かせ ない部分であり、必要な糧なので す。遠い昔となった1930年代に、す でに創立者が次のように書かれたこ とを、思い起こさずにいられるで しょうか。すなわち、オプス・デイ では全員が、「典礼の諸規定は、さ して重要ではないと思えることで も、すべて、一つひとつに気を配 り、ていねいに従うように、とくに 努めなければなりません。愛してい る人ならどんな小さなことも見逃す ことはないはずです。それらの小さ なことにとても偉大なこと、つまり 愛があることを知りました。そして 教皇様にごく小さなことまで従うの は、彼を愛することなのです。そし て教皇様を愛することはキリストを 愛することであり、主の御母、私た ちの至聖なる母上、マリア様を愛す ることです。だから私たちは、ただ このことだけを切に望んでいます。 彼らを愛しているのですから、私た ちは彼らを愛して、"omnes, cum

Petro, ad lesum per Mariam "一皆が、ペトロと共にマリアを通ってイエスへ。」 [56] カトリック教理の形成

23.神を真心から愛している人は、主 をもっと深く知る思いを募らせるは ずです。表面的な浅い付き合いでは すまされず、主に関することをすべ て、できる限り理解し尽くそうと努 めます。 「**神学――健全でしっかり** としたキリスト教の教え――を知り たいという熱意は、第一に、神を知 り神を愛したいという希望を動機と してもっています。同時にまた、創 造者の御手になるこの世が有する、 いとも深遠な意味を究めたいという 信者としての関心によるもので **す。**| [57] したがって、オプス·デ イがメンバーに与える教義の面から みた形成は、教会の教えを習得し、 その知識を深めることを目的として います。

これと同じ展望のもとに、福者ヨハ ネ・パウロ二世は、神と世界をみつ めつつ、現代社会にはカトリックの 教義による養成が必要であることを 指摘なさいました。「教理に関する 信徒の養成が、今日、急を要するも のであることは明らかです。それ は、信仰をよりよく理解することが 当然であるからだけではなく、世界 の深刻で複雑な諸問題をまえにし て、"希望の根源を説明する"ことが 必要だからでもあります。ですか ら、年齢とさまざまな状況に合わせ た系統的な信仰教育が絶対に必要で す。それはまた、今日の人間と社会 を悩ませる、絶えることのない、し かも新たな問題に答えることができ るように、文化をもっとキリスト教 的に向上させていくことでもありま す。」[58]

聖ホセマリアは、オプス・デイの草創期から、さらにその前でさえ、霊的な世話をしている人たちが教理的な

深い知識を身につけることに特別な 関心がありました。 「各人は、でき る限り、信仰に関する真剣な学問的 研究に励むべきです」 [59] から。

24.大聖グレゴリオが書いている通りです。「学問的な分別に欠けている信心は、まったく役に立ちません。」 [60] また「信心に役立たない知識は無用です。」 [61] 創立者がす説していたのは、このことです。すなわち、教理の学習に伴っていなればならないのは、誠実な霊的生ればならないのは、あイエス・さればならないのは、高イエス・との親密な交わり、至聖なるとめへの子としての信心であると。「真理はいつも、たしかに、聖なる

ものです。すなわち真理は神の賜であり、本質からして光である御方のもとへと私たちを導く神の光なのです。このことは、とくにその真理が超自然の段階にあるとみなされる場合にそうなります。ですから、敬意を払い、愛をもって関わらなければ

属人区が、そのすべてのメンバーと 他の大勢の人たちに、しっかい真 に取り形成を提供するために真 に取り組んでいるのは価値あるなお です。今の求められる取り間 を いなる要理教育(カテケージス) いなる要理教育(カテケージス) いうことができます。市民社会の 真っ只中にいて、単純なかたちで直接人々に働きかけ、生き生きと実践している要理教育なのです。」 [63] 教導職への忠誠と自由に意見を持つことができる事柄

25.教理的形成は、哲学から神学、教 会法などのすべての分野に及びま す。この養成において、ヌメラリー と多くのアソシエートは教皇庁立大 学のプログラムに沿って学修しま す。それは、聖ペトロが 「**あなた方** の抱いている希望について説明を求 める人には、いつでも弁明できるよ **うに備えていなさい**| (一ペトロ 3.15)、と述べたように、社会のあ らゆる階層に、言葉と行いによって 福音を生き生きと証しすることので きる決然とした人々がいるようにす るためのものです。

教導職から示される度重なる指針に 従って、様々な哲学的神学的説明に おいては、教会博士の共通の教えを とくに大切に扱います。こうして第 二バチカン公会議と、幾人ものローマ教皇の勧告にお応えすることができます。「聖トマスを師として、理論的考察の助けを借りて(…)、救いの秘儀を深く洞察し、それらの関連を理解することを学ばなければならない。」[64]

聖ホセマリアは、この線に沿って、 属人区の一般修学過程を担当ささせる 師たちにこのことを思い起こさ研究の のました。それと同時にをもちた。 の教会の勧告にかなて「それは何 も、聖トマスの教えをそのまま吸収 して自分のものにしとどめるだ、 と前 という意味ではありません」と説明 していました。

「それとは全く異なることです。この天使的博士の教理はたしかに研究 しなければなりませんが、もし彼が 今生きていたらそうしたと思われる 研究法で研究しなければなりません。ですから、時には、彼が始める ことしかできなかったテーマを完成 させなければならないこともあるで しょう。そしてまた、他の著者の考 案でも、真理にかなったものなら、 すべて受け入れます。」 [65]

創立者の言葉を引用して、オプス・デ イの精神の本質的な特徴を思い起こ してもらったばかりですが、「**私た** ちは団体として、聖座の教導職の教 え以外の教理をもっているわけでは ありません。私たちは教導職が受け 入れた考えをすべて受け入れ、しり ぞけた考えをすべてしりぞけます。 信仰の真理として提示されること を、私たちはすべて堅く信じるとと もに、カトリック教会の教理をすべ て自分たちのものとします。| [66] そして 「この広範な教えの範囲内 で、私たちは各自で個人的な見解を **身につけていくのです。** | [67] 創立 者が言われたとおり、属人区の『規入区の『相大とおり、属人区の『相大学』では、オプス・デイがり有ののでは、オプス・神学の学を信奉した。とのでは、ないまでは、ますのでは、ますのでは、ますのは、は、ますののでは、は、ないまが、は、まなのでは、ないまが、のとのできる人たちない。

使徒職のための形成

26.宗教の根本的真理を深く知ることは、自らの仕事の営みに密接に関わる仕事の倫理的・道徳的側面をよく知っておくことと同様に大切なことですが、それはまた、各自が置かれている職場の環境の中で広範な使徒職を行うためにも重要なことです。

「イエス・キリストに従う人々の光 は谷底に隠されるべきではなく、山 頂にあるべきですが、それは、"あなたたちのよい行いを見て、天においでになる御父をあがめる"(マタイ5,16) ためです。」 [69]

確かに広い心を持っている人は大勢 いて、神への愛に夢中になることの できる人たちですが、彼らには、歩 むべき道を導き人生に意味を与えて くれる教理の光が欠けています。そ の責任はキリスト者にあり、喜んで 彼らに助けを提供しなければなりま せん。新約聖書の一場面が、それを はっきり例証しています。聖霊の命 令に従い、助祭フィリポはガサへの 道を辿ります。途中、エルサレムで の神礼拝を終えて帰途についていた エチオピアの女王の高官が乗る馬車 に出合いました。 「**フィリポが走り** 寄ると、預言者イザヤの書を朗読し ているのが聞こえたので、"読んでい る事がお分かりになりますか"と言っ た。宦官は"手引きしてくれる人がな ければ、どうして分かりましょう"と

言い、馬車に乗ってそばに座るよう にフィリポに頼んだ。」 (使徒言行 録8,30-31)

イエスのよきたよりを、穏やかに根 気よく告げ知らせるのは、カトリッ ク信者の務めです。つまり啓示され た教えを広めることによって、宗教 的無知を取り除くことです。 「**同僚** の中の一人として生活する普通のキ リスト信者、その信者の使徒職はす ばらしいカテケージスであると言え ます。誠実で真摯な友情と交際を通 して、人々を神への渇望に目覚めさ せ、新しい視野を示すのです。前に もふれたように、ごく自然に、地味 に、行いを伴った信仰の模範と、優 しいが神の真理に基づく力強い言葉 によって助けねばならないので す。| [70]

キリストの真理を熱心に伝え広め て、私たちがいただいた宝を人々と 共有できるようにすべきですが、そ のために彼らに体験してもらうのは次のことです。つまり「福音に驚きを感じること、キリストと出会うこと以上にすばらしいことはありません。キリストを知ること、私たちがキリストの友であることを、人にありること以上にすばらしいことはありません。」[71]

27.第二バチカン公会議の『信徒使徒 職に関する教令』はこう教えていま す。「使徒職は、多様にして十全な 養成を通してのみ、十分な効果を上 げることができる。この養成は、信 徒が霊的に教義的に絶えず進歩する ために必要なだけではなく、人や職 場などさまざまな環境に信徒の活動 を適応するためにも要求される (…)。すべてのキリスト者に共通 した養成に加えて、人や環境の違い から、種々の形態の使徒職は、特殊 で独自な養成を必要としている。| [72]

近年、伝統的なキリスト教国でも市 民権を得るほどに蔓延している世俗 主義を阻止するため、使徒職への熱 意を燃え立たせることがいっそう求 められています。これらの国民をそ の根幹からキリストの精神でふたた び潤すこと、まさしくそれが新たな 福音化の目的なのです [73]。属人区 においてこの務めは、洗礼によって 与えられた福音宣教者の使命を果た せるように、各自を指導し励ます仕 事に要約されます。それはオプス・デ イの精神に従い、その固有の方法を 用いて、すなわち **「友情と打ち明け** 話の使徒職 | を诵して実現されるべ き使命です。

ヨハネ・パウロ二世は次のように力説なさいました。この社会は、「"信実な福音宣教者"が、キリストの十字架と復活における主との交わりを通して、"自らの生活のうちに"、"福音の美しい輝きを放ってくれること"を求めています(…)。洗礼を受けたす

べての人は、キリストの証人としての立場にふさわしい形成を受けなければなりません。それは、世俗化した環境の中で、信仰が敵対視され枯れてしまわないようにするためだけでなく、福音宣教者の証言を守り促すためでもあります。」 [74] 友情と打ち明け話の個人的な使徒職

28.主はすべての人が永遠の命を得る ことができるように、この世にお降 りになりました。そして主は、救い のために弟子たちの協力をも頼りに なさり、" ut eatis "—出かけて一実 りを結び、その実が残るように(ヨ ハネ15,16参照)と使徒たちに仰せに なったことを、私たちキリスト者に も繰り返されるのです。だから、子 供たちよ、多様な環境の中で主の教 えを伝えなければなりません。主に 導くために、私たちはすべての人に 関心をもっているはずですから。そ の手始めは、当然ながら、神が私た

ちのすぐ傍らに置いてくださった人 たちにまず伝えることです。

オプス・デイ属人区においては、先にも述べたように、「**友情と打ち明け話の使徒職**」と聖ホセマリアが呼んでいた使徒職を優先させます。それはつまり、心からわき出て相手のの知識とキリストの知識とキリストへの愛を注ぎ込むような個人的付き合いで表もり、相手の心を開いて恩恵の優しいに応えやすくしてあげる付き合いなのです。

友情というものはお互いに共通の感情や熱意を抱くことで成り立ちもあることで成り立ちもあるといる。これを培うもので疎通にしてといるという。としてといるという。というではなって、あると言えるでしょう。とがないによって、の第一歩が踏み出されます。した

がって、自分の仕事や社会活動を通 して新しい友達と知り合うことがで き、彼らを助け、また自分も彼らか ら学びたいという望みをもって、そ の出会いを活用できるのは、私たち にとって嬉しいことです。というの も、友情は本質的に相互の関わりだ からです。創立者は私たちを励ま し、日常生活という小道を歩む私た ちが、人々の傍らを"通りかかるキリ スト"としてふるまうように鼓舞して いました。 「**主は、この世で人々の** 友となっていくために私たちを役立 てたいとお望みです。つまり、私た ちが人々と交際することによって、 また、主から与えられた自分の能力 を使いながら、友を愛し自分もまた 愛されるという私たちの交友を通し て、人々の友でありたいとお望みな **のです**。| [76]

このような特徴的なやり方で人々に 奉仕しようとするとき、とりわけ私 たちに求められる態度とは、相手の

能力や考え方に合わせながら、各自 に理解してもらえるように話すこと です。聖ホセマリアは、相手に理解 してもらうためのこのような努力を 「**言葉の賜**」 と呼んでいました。こ の賜はもとより神の恩寵の発露なの ですが、教会の教理に耳を傾ける人 の心にその教えが新鮮な音調で響く ために、話に先立って自ら祈り、準 備しておくという個人的な努力の成 果でもあるのです。 「同じことを 様々な言い方で繰り返さなければな りません。形はいつも新しく、相異 なっているべきですが、教えそのも **のは不変です。**| [77]

イエスは最も深遠な教えをたとえ話 や比喩(ひゆ)を用いて説明された ので、聴衆は自分のレベルに合わせ て理解できるようになりました。こ の主のやり方に倣うことです。キリ スト教の真理を魅力的なかたちで説 明したいという望みを育てましょ う。「**いつも、塩で味付けされた快** い言葉で語りなさい。そうすれば、 一人ひとりにどう答えるべきかが分 かるでしょう」 (コロサイ4,6) 。 しかしそれは、形式にこだわること でも、博識を誇示するためでもな く、神の栄光と人々の善を求めつ つ、中身の濃い話をすることです。

29. これに関連して、旧約および新 約聖書の深い知識をもつことが根本 的に重要になります。それは、聖書 を丹念に読み込み、注意深く黙想す ることによって得られる成果です。 教皇ベネディクト16世は最近、教会 の使命における神のみことばについ ての使徒的勧告、"Verbum Domini "でそのことを思い起こさせてくだ さいました。そこで、聖書の霊的意 味を深く掘り下げるための特別な光 を主から与えられた偉大な聖人たち を取り上げられ、教皇様は、その光 線のひとつの現れが「聖ホセマリ ア・エスクリバーのうちにあり、ま た聖性への普遍的召し出しについて

の彼の説教に」 [78] あると明言な さっています。

ローマ教皇は、こう述べられます。 「神のみことばが適切にも中心に置 かれていることを再認識できる、教 会の司牧的推進事業の重要な場面と は、要理教育(カテケージス)の時 です。この要理教育は、それぞれの 段階に種々の形態で、神の民の歩み につねに伴っていなければなりませ ん。| [79] そして説明なさいます。 「福音記者ルカが伝えている、エマ オに向かう2人の弟子たちとイエス との出会いは(ルカ24,13-35参 照)、ある意味で要理教育のモデル を示しています。つまり、その中心 には"聖書の説明"があり、しかもそ れはキリストだけが教えることので きる説明で(ルカ24,27-28参照)、 聖書のことばがご自身において成就 されたことを示されたのです。こう して、いかなる失敗にも勝る強い希 望を取り戻したあの弟子たちは、主

の復活が信じるに値することを、確信をもって証ししたのです。」 [80] 創立者がある説教でとても嬉しそうに明言された次の言葉が、皆さんの記憶によみがえるのではないでしょうか。今、「エマウスとは全世界のこと、主は地上から神に至る道を開いてくださいましたから。」 [81]

聖ルカが語るこの章句の教えを、創 立者がどのように私たちに伝えたか を思い起こしてください。このよう に解説されました。 「**キリストの全** 生涯は、私たちが倣うべき神的手本 です。しかし福音記者の語るエマオ の場面は、とりわけ私たちに関わる **話です**」 [82] 友情と打ち明け話の個 人的な使徒職について話してくださ る時にも、福音書のこの場面を使わ れました。重要な事柄として執拗に 説かれたのは、自ら率先して人に会 いに行くことが必要であり、相手が だれであれ、プライバシーと自由を 尊び守りながら、神を求めている友

の手助けをしなければならにという ことです。

復活したお方は、エマオの道へと2 人の弟子を探しに行かれる。2人は 自らが目の当たりにした、あの痛ま しい事件―ご受難とご死去―に落胆 して、すでに帰郷の途にありまし た。イエスのこのふるまいは、友人 の喜びと悲しみを共有し、相手のた めに時間を割き、連帯することが友 情の真髄であると教えます。 「人生 が無意味に見え始めるほど希望を 失っていたあの二人と、イエスは歩 みをともにされました。彼らの心痛 をよく理解して、心の奥まで見抜 き、ご自分の神的生活をいくばくか 彼らにお伝えになったのです。 [83] 私たちも同じように、付き合い のある人たちの心配事や夢や難題を 共有しなければなりません。職場や 什事仲間の間で同僚の一人としてふ るまい、彼らとの間を隔てるいかな る壁も作ってはならないのです。こ

れがオプス・デイの精神のすばらしい 特色であり、誰をもその持ち場から 引き抜くことなく、俗物にならない ように気をつけながら、世間に留ま るように招きます。

私たちは自分の生活環境で、このよ うにふるまわなければなりません。 私たちが忠実なら、イエス・キリス トが私たちのうちで働かれることを 見落としてはいけません。そして主 は、他の人々に近づくために私たち の模範と言葉を役立てたいとお望み なのです。それと同時に、その友情 によって私たちを豊かにしてくださ るのです。本当の友達なら、ごく自 然に喜びや悲しみを伝え合い、仕事 のことを語り合うものですから、キ リスト者の場合は、自分のもつ最高 の宝物、すなわちキリストの生涯そ のものを分かち合うのは当然です。 彼らに神について話し、さらに恩恵 によって自分の心に神をいただく喜 びについて、そして主のみが人間と

いう存在に授けることのできる、は かりしれない価値について話すので す。

キリスト信者は、このようにふるまうことで、教会の福音宣教の使命に効果的に協力していることになります。つまり、知人の心と霊魂にキリストを引き入れることによって、人間の全活動の頂点に主の十字架を高く上げる使命に自ら貢献しているのです。

家族と青年対象の使徒職

30.神の国を力強く広げていくための活動はたくさんあります。しかし、それらの活動の中には、それぞれの時代や地域の必要に応える、きわめて重要な分野がたしかにあります。それはまず、家族のための活動であればまず、家様の世界で行われる形成の活動であって、教皇様が奨励なさる新しい

福音化を目ざして多くの所で挑戦を 試みるべき分野なのです。

創造主である神が家族に望まれた本 来のあり方、つまり「腐植土」(い のちを迎え、育てるよい土:訳注) としての家族のあり方を、緊急に再 確認する必要があります。家族は多 くの国において、不幸にも法律や習 慣によって、執拗に毒され乱されて いるからです。これは主要な課題で あり、カトリック信者である私たち が、他宗教の信仰者と、あるいは無 宗教の人たちと一致協力して取り組 むべき仕事です。この人たちは、家 族というものを――夫―婦の愛の交 わりであり、不解消であるとともに いのちを受け容れる家族を一大切に 育てていくことが、正しい社会秩序 を築くために不可欠な柱であり、さ らに人が円熟し幸福を得るための重 要な基盤となるということをよく自 覚しています。さらに私たちは、他 の人たちと協力して個人的に支援す

青年たちとの使徒職は、この社会と 教会にとってつねに死活問題となる でしょう。社会の進む方向を正しい ものとし、創造主にして贖い主であ る方が描かれた道にそって社会を進 ませていくはずの人たちを、その青 年期に鍛えることだからです。

この領域でとくに際立つのが、娯楽と余暇の活用についての使徒職です。ここでは、2002年に皆さんに書き送ったことを思い起こしてもらう

だけに留めておきます。「習慣、法律、ファッション、マスメディア、芸術表現など」をキリスト教的な中味で満たすことが必要であり、「教皇様が休みなくキリスト信者に呼びかけておられる社会の再福音化のための戦いを、社会生活のあらゆる側面で実践すべきです。」 [84] 使徒職と文化

31.思想や文化、科学、文学、技術と いった広範な分野が、あたかも特別 区 * であるかのような様相をみせて います。それこそ福音の光で照らさ れなければならないところなので す。「キリスト者は、現代文化から のそそのかしに抵抗しつつ、批判的 な精神をもって立ち向かえるだけの 信仰を持たなければなりません。す なわち、文化や経済界、社会制度や 政界に効果的な影響を与え、カト リック教会の信者同十および他のキ リスト教徒との交わりが、他のいか なる民族的な絆よりも強いことを示

して次の世代に喜んで信仰を伝えなければなりません。現代よりもさらに広汎な分野で文化を福音化できるようなキリスト教文化を築き上げねばならないのです。」 [85]

オプス・デイの使徒職は「果てしない大海原」のようです。十字架上のキリストのように、私たちも両院入りを受けています。聖ホセマは、と思ったように私たいると思ったように私たいる人ではあるまで至りたいと切に願っ一信うよう。創立者は「 ad fidem " 一信うです。創立者は「 ad fidem " 一信うです。創立者は「 ad fidem " 一信うです。創立者は「 ad fidem " 一信うです。創立者は「 ad fidem " 一信がよ

gentes "つまり、異教徒(未信者) との使徒職にとくに力を入れるよう に(…)」と励ましていました。 「いつも繰り返したいことですが、 まず初めに、誠実、忠実な友情を

もって、人間的にも善い友達になる **ことです。** | [86] このグローバル化 した社会の中で私たちが仕事に従事 するとき、そこから生まれる人間関 係も自ずと多岐にわたるようになり ます。その結果、他の信仰や信条を もつ人との対話、あるいは無宗教の 人たちとの対話もたやすくできるよ うになっていくでしょう。この機会 を生かして、この人たちに神をよく 知る望みを引き起こしてあげたいと いう期待をもって、語り合うように しましょう。また、カトリック教会 に否定的な態度をとっている人たち に対しても、私たちの方から柔和な 心で忍耐強く理解を示し愛情をもっ て接するように努めなら、彼らを助 けていることになります。

ベネディクト16世は、教皇庁での講演の中でこう語られました。「不可知論者や無神論者として自ら言明している人たちも、信仰者の私たちに関心をよせるべきであるという考え

方が、何よりも重要だと思います。 私たちが再福音化について語ると、 この人たちはたぶん驚きます。宣 の対象者として見られた自由をはなり の思想と意思のし、神がるしたくないのです。したくないできないできないとを 結局信じることができないまました。 の中でも残っているのです。」 [87]

この種の企画に参加するのは限られた一部の人たちであるとしても、私たちは祈りによって彼らを支援する心積もりがなければなりません。私たちはめいめい聖なる教会の神のですから、地の果てに至るまでです。すべての文化に、主の御名を伝えるすべての文化に、主の御名を伝えずためにだけ生きていたいと思うはずです。

職業的形成

32.オプス・デイの精神に従って日常の仕事を打ち立てるとき、その仕事は個人の聖性の"基軸"であり、信者の使徒職が行われるいつもの場ですから、属人区においては職業上のすぐれた準備教育が推進されるはずです。「勉強も職業上の形成も何であれ、私たちの間では重大な義務である。」[88]

近年、教会の教導職が、信徒の立場から聖性を目指す領域として、仕事のテーマに取り組みましたが、私のまたというないを思いないがでで、はいるで教会は、「すさいのでで、は働くとをいうできないででででは、がは、ではいるでは、ではいるでは、ではいるでは、あがないでは、では、あがないでは、では、人画とというでは、では、他人の友情を深との方はないでは、"働くことがはないでは、"働くこと"を」[89]強調した。

仕事、そして生活の一致

33.聖ホセマリアは、説教「愛すべき 天地」の中で、キリスト信者の信心 と仕事と使徒職を協調させる"生活の 一致"の大切さを強調しました。

「私が聖書の言葉を使って常にお教 えしているように、世界は良いもの です。それは神の御手から出たも の、神の被造物であり、神なる主が ご覧になり、よしと思われたからで す(創世の書1.7以下参照)。良き 世界を悪いもの醜いものとしたの は、私たち人間の罪と不信仰です。 皆さん、決して疑わないでくださ い。この世に属する皆さんのような 男女が日常の正当な諸現実から逃げ るようなことがあれば、それは神の み旨に反する生き方です。 「逆に、 人間生活の社会的、物質的、世俗的 な仕事の〈中〉で、それらを〈通 して > 神に仕えるよう招かれている ことを今、改めてはっきり理解して いただかなければなりません。研究

所や病院の手術室、兵舎や大学の教壇、工場や作業場、田畑や家庭、その他広範にわたるあらゆる種類の中で、神は日々私たちを行っておいっておい。ごくありふれた状況の中によさい。ごと、神的なものが隠れています。そして、それを見つけ出すのでは、私たち一人ひとりの責任なのです。(…)

「皆さん、平凡な日常生活の中で主に出会うことができるか、いつまれても出会わないか。これ外ちはありません。それのやれたものや表ができるがあると言えます。それには、神の異があると言えます。それにの手段とし、機会にしなければなりません。」 [90]

属人区が提供する形成は、各自が奉 仕への熱い望みをもち、人間的にも できるだけ完璧な什事をするように 努め、その仕事を聖性と使徒職の道 具に変えて役立てることができるよ うに、超自然的な精神を養うことを 目指しています。このために私たち は、同僚の間で職業上の名声を得る ように努めるべきですが、それは長 年にわたる根気のいる献身の結果獲 得できるものです。この専門的な養 成は、めいめいが他の市民と同様 に、大学や専門学校や工房などで学 び、技術を身につけます。オプス・デ イの精神は、私たちがこの準備期間 に学んだことをつねに保ち、より充 実させるよう促します。私たちが皆 承知しているのは、自分の職業を選 ぶのも仕事のやり方も全く自由であ るということです。オプス・デイが教 えるのは、ただその仕事を聖化する 方法だけであって、めいめいの仕事 上の選択に干渉することはありませ h.

どんな仕事に従事していようと、そ れがまじめな仕事なら問題はありま せん。 「**次のどちらがより大事で** しょうか。ソルボンヌ大学の教授に なることか、家事をすることか。も しあなたが聖なる人なら仕事を聖化 しているわけですから、その仕事が 最も重要です、とお答えしましょ **う。** | [91] 他の折に、次のように言 い足しています。 「**ナバラ大学で働** いている清掃の婦人たちについて話 している時、その仕事が理事会の仕 事くらいに大事か、あるいはそれよ りもっと重要か、私には分からない と述べました。それは冗談などでな く、私がいつも考えていることを単 に繰り返しただけです。その係の婦 人の一人が喜んで仕事に行き、何も かも愛のために行うなら、それは英 雄的な行いになり得るし、決して低 級な仕事などではなく、片や、自分 の研究成果をただ公表することしか 考えていない大研究者の仕事より も、もちろん実り多いものになるは

ずです。重ねて言っておきます。より価値あることは何か。それは自分の仕事をしていくうえでの愛と犠牲にかかっています。けれどもその犠牲は心から出たもので、自主的に喜んで捧げるべきであって、そうでないならしない方がましです。」 [92]

キリストが実際にこの社会を支配なさるために、カトリック信者は皆、自分に任せられている務めを果たす責任があります。そして、キリストの支配を望むこの聖なる願いは、第上の名声を得るための職業上の名声を得るための高いも表れるはずです。仕事上の高いにも表れるはずです。仕事上の光が輝きわたるに必要な"燭台"なのです(マルコ4,21参照)。

学生の場合、自己の義務は良い成績 を取ることだと自覚しなければなり ません。聖ホセマリアが『道』に記 したあの考察を忘れないでくださ い。世界中で多くの世代の青年たち を導くことのできた一節です。 「現 代の使徒にとって、一時間の勉強は 一時間の祈りである。」 [93] 正しい 意向

34.私たちは皆、何かの仕事につく準 備に勤しまなければならないのと同 時に、仕事とは、それがどんなもの であろうと、私たちにとっては聖性 に達するため、そして使徒職に気を 配るためのいつもの"手段"であるこ とを、責任をもって覚えておきま しょう。現今はこの観点を見失わな いようにすることが、ことのほか大 切です。というのも、今日の社会は 非常に競争が激しいために、仕事を 最優先して熱中し、神に対する義務 も家族への義務も、他の人たちへの 諸々の義務も二の次にしていまいや すいからです。創立者とともに私は 繰り返します。 「神に向かい合って 働き、人間的な誉れに対する野望を いだかないことです。仕事に対する 見方はいろいろあり、名誉を勝ちと

るためのただの手段と考える人もいれば、個人的な野心を満たしてくれる権力や富を得るための手段として、あるいは自分の力量を自慢するための手立てと考える人たちもいます。

「オプス・デイにおける神の子らは、 自己の専門職を利己心や虚栄心、あ るいは高慢に結びつけるような見方 は決してしません。神への愛ゆえに すべての人に仕えるための、ひとつ の機会として考えるだけです。 [94] ですから 「**自分の仕事には正し** い意向をもって取り組むべきです が、その意向の正しさは、まさしく 人々を神の近くに導くための努力に 表れ、職業生活から自ずと生じる交 友関係や人々との社会的なつながり を活用しようと努める態度に表れる はずです。こうして条件が整い、ふ さわしい状況が認められるようにな ると、彼らに召し出しの問題を持ち 出すことになります。| [95]

就職の準備教育や職業訓練の間は、 当然ながら自己の専門分野に関係の 深いカトリックの教理や、自国の特 殊な現状に関連する教理のテーマを よく知っておく必要があります。地 域によっては異なる場合もあるで しょうが、どこに行っても通用する こともあります。たとえば、結婚と 家族に関すること、教育の問題、"い のちの福音"、生命倫理、労使関係に おける正義と愛徳などです。した がって、職業上の義務や家族に対す る義務、そして社会的な義務を模節 的にきちんと果たすなら、結局それ は、私たち皆が示すべき信用のおけ る証を行っていることになるので す。皆さんに書いた诵りです。「皆 さんが人間として、またキリスト者 として正しく生きるなら、その結 果、皆さんの生活が展開するその環 境の中で、善意の人々との高貴で兄 弟的な協力のもとに、具体的な社会 問題の解決に直接つながるたくさん のイニシャティブが生まれるでしょ

う。今このとき、心を挙げてわれらの主に感謝します。属人区の周りでは、カトリック信者とそうでない多くの協力者の助けで、この世に正義と平和を植え付けることになる連帯感が十二分に開花し、何十万もの人々に、創立者が言っていたような、"強くて穏やかな愛の聖香油"(『知識の香』183番)をもたらしているからです。」 [96] 自発的な使徒職

35.子供たちよ、次のことを改めて提示したいと思います。「オプス・ディとその子供たち一人ひとりの唯一の野心、唯一の望みとは、主が与えてくださった特有の召し出しの中で、教会が望むような仕方で教会です。」 [97] そしてとることです。」 [97] そしてとることです。」 「97」 そしてとることです。」 「97」 そしてとることです。」 がお望むにありたがありたい。なぜなら、教会に協力するための独自の方法は、神がお望みになったように、

様々な局面においてふさわしい形成を人々に提供することにあるの任務です。オプス・デイ属人区はこの任務では、全力を変更ないで、全力をでいるというというで、とがでいるというでは、とがでいるをもとに、の社会をもとに、の社会をもとに、の社会をもとに、の社会をもとに、の社会をもとに、かずでは、このはのでは、というでクチンでを注ぎ込むは、

オプス・デイの特徴をよく表している この面について質問したある記者 に、創立者はこう説明しました。

「"個人の自発的な使徒職"を最重要視し、それを基本にしています。各自が聖霊に導かれて自由に、そして責任感を持って自発的に行う使徒職です。つまり、組織や仕組みを頼りにする使徒職ではなく、統治本部のトップから下された指令とか作戦、あるいはノルマのような行動計画に

従っているわけではありません。」 [98]

この手紙を終える前に、根本的なこ とに立ち戻りたいと思います。来る 日も来る日も、キリスト者として神 と人々のために献身するように努め ましょう。ローマ教皇とそのご意向 のために絶えず祈り続け、教皇様に は最高の忠誠をちかう男女として励 みましょう。司教方とすべてのカト リック信者とともに、実りある愛の 一致のうちに歩みましょう。楽観主 義にみちて、主への深い感謝のうち に、再福音化の務めに与りましょ う。世界の元后、教会の母なる聖母 に馳せより、私たちに必要な天の恩 恵を獲得してくださるように執り成 しを求めましょう。

当然ながら、私たちはこのような形成の仕事すべてについて、特別の仲介者聖ホセマリアをいただいています。創立者は、1928年10月2日に神

から授けられた精神を、自らの生涯 と教えによって、具体的な明らかな 形にして残してくださいました。そ れは彼の娘たちと息子たちをはじ め、多くの人々が、聖霊の恩恵を得 てこの世のあらゆる道を神的なもの にしつつ、歩むことができるため だったのです。

心からの愛を込めて祝福を送ります。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2011年10月2日

[1] ベネディクト16世、2007年11月 30日、回勅『希望による救い』2 番。

[2] ベネディクト16世、2010年9月 21日、使徒的書簡 Ubicumque et semper 参照。

- [3] ベネディクト16世、2011年8月 21日、WYD 閉会ミサの説教。
- <u>[4]</u> 聖ホセマリア、『会見記』24 番。
- [5] 聖ホセマリア、1945年5月6日、 手紙19番。
- [6] 聖ホセマリア、1931年3月24日、 手紙9番。
- [7] 聖ホセマリア、『道』372番。
- [8] 聖ホセマリア、1972年6月18日、 家族の集いでのメモ。
- [9] 聖アウグスティヌス、『説教』169,13 (PL38,923)。
- [10] 聖ホセマリア、1963年、家族の 集いでのメモ。
- [11] 聖ホセマリア、『神の朋友』24 番。

- [12] 同上 26番。
- [13] 同上。
- [14] 聖ホセマリア、1932年1月9日、 手紙28番。
- [15] ヨハネ・パウロ2世、1988年12 月30日、使徒的勧告『信徒の召命と 使命』63番。
- [16] アタナシウス信経。
- [17] 第二バチカン公会議『信徒使徒 職に関する教令』4番。
- [18] 聖ホセマリア、『神の朋友』74番。
- [19] 同上84番。
- [20] 同上。
- [21] 聖ホセマリア、1972年11月28 日、家族の集いでのメモ。

- [22] 『カトリック教会のカテキズム』1808番。
- [23] 聖ホセマリア、『神の朋友』77番。
- [24] ベネディクト16世、2007年10 月28日、「お告げの祈り」における 講話。
- [25] 聖ホセマリア、『道』380番参照。
- [26] ヨハネ・パウロ2世、1999年11 月18日、定期訪問のためにローマを 訪れた司教団への講演。
- [27] ドン・アルバロ・デル・ポルティーリョ、『司祭に関する論述』 (リアルプ社、マドリード、1990年)、第6版、24頁。
- [28] 聖ホセマリア、1956年8月8日、 手紙47番。

- [29] ヨハネ・パウロ2世、1988年12 月30日、使徒的勧告『信徒の召命と 使命』60番。
- [30] ベネディクト16世、2007年2月 22日、使徒的勧告『愛の秘跡』64 番。
- [31] 聖ホセマリア、『道』947番。
- [32] 聖ホセマリア、1964年10月30 日、家族の集いで。
- [33] ヨハネ・パウロ2世、1979年8月 19日、説教。
- <u>*</u> 訳注:「コンフィデンス」には、 「信頼」、「打ち明け話」の意味が ある。
- [34] ヨハネ・パウロ2世、1982年11 月28日、使徒憲章 Ut sit 参照。
- [35] 聖ホセマリア、『ウェルガスの 修道院長一神学・法学的研究』(リ アルプ社、マドリード、1974年、第

3版)、153頁参照。最近、聖職者省から刊行された文書、『神の慈しみによる司祭職、聴罪師、霊的指導者』(2011年3月9日)の65番で、「十分な形成を受けた信徒は(…)、聖性の道で、この助言の奉仕職を果たす」と、明らかに述べられている。

[36] 聖ホセマリア、1970年12月31 日、説教のメモ。

[37] 聖ホセマリア、『会見記』93 番。

[38] 聖ホセマリア、『神の朋友』15 番。

[39] 同上188番。

[40] 聖ホセマリア、『知識の香』 135番。

[41] 聖ホセマリア、1945年5月6日手 紙35番。

- [42] 聖ホセマリア、『神の朋友』 157番。
- [43] 同上161番。
- [44] 第二バチカン公会議、『典礼憲 章』2番参照。
- [45] 聖ホセマリア、『知識の香』87番。
- [46] ベネディクト16世、2007年11 月30日、回勅『希望による救い』2 番参照
- [47] 『ローマミサ典礼書、総則』55 番参照。
- [48] 聖ホセマリア、『知識の香』89 番。
- [49] ダマスコの聖ヨハネ、『正統信仰の解明』IV, 17 (PG94,1175)。
- [50] "Vivir la Santa Misa", Rialp, Madrid 2010, pp. 65-66.

- [51] ヨゼフ・ラッツィンガー ベネディクト16世、 "Opera omnia," vol. XI,(『全集』第11巻、序文)。
- [52] 典礼秘跡省、2004年3月25日 『あがないの秘跡』5番。
- [53] 第二バチカン公会議『典礼憲章』11番参照。
- [54] ベネディクト16世、2006年8月 31日、アルバノ教区の司祭たちとの 集いで。
- [55] 聖ホセマリア、『鍛』833番。
- [56] 聖ホセマリア、『内的覚え書き』110番(1930年11月17日)。ドン・アルバロが1991年10月15日の手紙で引用。
- [57] 聖ホセマリア、『知識の香』10番。

- [58] ヨハネ・パウロ2世、1988年12 月30日、使徒的勧告『信徒の召命と 使命』60番。
- <u>[59]</u> 聖ホセマリア、『知識の香』10 番。
- [60] 大聖グレゴリオ、『道徳論』I, 32,45(PL75,517)。
- [61] 同上。
- [62] 聖ホセマリア、1965年10月24 日、手紙、24-25番。
- [63] 聖ホセマリア、1940年3月11 日、手紙、47番。
- [64] 第二バチカン公会議、『司祭の 養成に関する教令』(Optatam totius)n.16. 以下の諸文書を参照: 1939年6月24日、ピオ12世、講演、 1964年3月12日; パウロ6世、講演、 1998年9月14日; ヨハネ・パウロ2 世、回勅『信仰と理性』43番以下。

- [65] 聖ホセマリア、1951年1月9日、 手紙22番。
- [66] 聖ホセマリア、1964年2月14 日、手紙1番。
- [67] 聖ホセマリア、1961年4月30 日、家族の集いでのメモ。
- [68] 『聖十字架司祭会とオプス・デ イ属人区固有法』109条参照
- [69] 聖ホセマリア、『知識の香』10 番。
- [70] 同上149番。
- [71] ベネディクト16世、2005年4月 24日、就任ミサ説教。
- [72] 第二バチカン公会議『信徒使徒職に関する教令』28番。
- [73] ベネディクト16世、2009年6月 29日、回勅『真理に根ざした愛』29 番参照; 2006年10月19日、2007年6

月11日、2010年3月12日、2011年9 月24日の講話参照。

[74] ヨハネ・パウロ2世、2003年6月 28日、使徒的勧告『ヨーロッパにお ける教会』49番。

[75] 聖トマス・アクィナス、『ニコマコス倫理学の解説』 IX,14.

[76] 聖ホセマリア、1932年1月9日、 手紙 75番。

[77] 聖ホセマリア、1946年4月30 日、手紙 71番。

[78] ベネディクト16世、2010年9月30日、使徒的勧告 Verbum Domini,48番。

[79] 同上 74番。

[80] 同上。

[81] 聖ホセマリア、『神の朋友』 314番。

- [82] 聖ホセマリア、1951年4月、家 族の集いのメモ。
- [83] 聖ホセマリア、『知識の香』105番。
- [84] 2002年11月28日、手紙11番。
- * 訳注:特別区;特別の才能に恵まれた人たちだけのための領域。
- [85] ヨハネ・パウロ2世、2003年6月 28日、使徒的勧告『ヨーロッパにお ける教会』50番。
- [86] 聖ホセマリア、1973年4月15 日、家族の集いのメモ。
- [87] ベネディクト16世、2009年12 月21日、教皇庁での講演。
- [88] 聖ホセマリア、『道』334番。
- [89] ヨハネ・パウロ2世、1981年9月 14日、回勅『働くことについて』24 番。

- [90] 聖ホセマリア、1967年10月8日、説教『愛すべき天地』(『会見記』114番)。(邦訳『教会を愛する』83頁~85頁に所収)
- [91] 聖ホセマリア、1961年8月30 日、家族の集いでのメモ。
- [92] 聖ホセマリア、1969年4月10 日、家族の集いでのメモ。
- [93] 聖ホセマリア、『道』335番。
- [94] 聖ホセマリア、1948年10月15 日、手紙18番。
- [95] 同上31番。
- [96] 1999年6月1日、手紙。
- [97] 聖ホセマリア、1943年5月31 日、手紙1番。
- [98] 聖ホセマリア、『会見記』19 番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/si-mu-shu-jian-2011nian-10yue-2ri/(2025/12/16)